神様と奴隷二

　　　　　　　　上荒磯　佑哉

　俺は、次のを呼び込む呪文、「次の方、どうぞ」を唱える。思えば今日は厄日だと思う。イチャイチャカップルに滑舌の悪い神様。やっかいな神様のダブルパンチ。全く、俺がいったい何をしたというか教えてもらいたいものだ。

「いらっしゃいませ」

　　俺は、そんなことを思いつつも決して表に出さず柔やかに言う。目の前には、俺と同じぐらいの年若い女だった。よく見ると、顔立ち整っている。まぁ、だからといって何なのという話なのだが。

　残念ながら、数時間のレジカウンターという業務はの心を殺すには十分な凶器である。

「ご注文はどちらになさいますか？」

「えっと、このセットをポテトのエムで」

　そう言い、女性の神様はピーク時にもかかわらず、確かに俺の耳に届く声量で俺に申しつける。しかも、俺がメニューを打ち込むまで待ってくれてるー！

「ドリンクはどちらにいたしますか？」

「これのエムで」

「はい。当店でめしあがられますか。」

「お願いします」

「お会計、五百円となります。お席まで、おもちいたしましょうか？」

「ありがとうございます」

目の前の神様は、俺に笑顔でお会計とポイントカードを差し出す。俺は、いつもどおり仕事を終わらせるとその神様を見送るのだった……うん！　天使かな！　エッ何あの神様！　注文は聞こえるし、サイズは聞く前に答えるし、お会計はぴったり払う。しかも、何よりテイクアウトか、店内か食べるか最後にしかも聞かれる前に答えてる。

一般的な神様は何を思っているのか、テイクアウトかどうかを最初に言いがちだが、はっきり言おう。そんなこと最初に言ったからといって、こっちは何も出来ないのである。なぜなら、マニュアルではその質問は最後になっており、レジでも順番的にそれの入力はあとになっている。何が言いたいかというと、こっちは間違えられない状況で戦っているのにそこに余計な情報が入ると、非常に迷惑なのである。

そこで、柔軟な接客をするのがプロだろと思うかもしれないがそんな時間は大手ファストフード店には無い。そもそも、一日百人以上来る神様全てにあった対応が出来るなら、俺

　ま、表には出さないけど。それに、本当に希少な神様、いや天使に巡り会えたんだ。ｍ、もう絶対に会うことは無いだろうけど、この出会いをできるだけ俺は覚えておこうと思おうと、天使がむかった方を向く。そこには、俺の視界を遮るように一人の神様が立っていた。その肌は黒く、その顔立ちは明らかに日本人の顔立ちでは無い‥……ワーォ、ミス外国人。

「taku outo」

 俺は、そんな流暢すぎるその言葉を聞き心がまた死んでいくのを感じた。

　余談だが、この天使との出会いが俺のバイト生活に色々な意味で色を足す存在なるとは

思いも知らない。